

辺境からFrontierへ

—The Frontier Within: Essays by Abe Kōbō 書評

鳥羽 耕史

本書を最初に手にした時、虚をつかれる思いをしたのは、その書名によってだった。中心から遠くはなれた最果て、安部のライフヒストリーに即して考えれば幼少期を過ごした旧満州国奉天（現・瀋陽）の町外れに広がる、地平線までの荒野のイメージが、アメリカで翻訳される時には、西部開拓の最前線の記憶を担ったFrontierになるのか、と。それは翻訳者のカリチマンがそうした文化の差異に無自覚なまま用語を置き換えたということではなく、翻訳という営為には必然的にそうした文脈の変換も含まれるのだ、という実感としてである。和英辞典を引いてみて、marginやperiphery、あるいはborder area、remote regionなどと置き換えてみても、それでしっくりくるわけではなく、「内なる」辺境という際の意味の広がりや矮小化されてしまい、適切とは思えない。ただ、安部公房の「内なる辺境」という語には、そのタイトルのエッセイを超えて、その20年前に発表された短篇集『壁』に含まれる諸々のイメージ——S・カルマ氏が雑誌の写真から胸の中に吸い込んでしまった曠野のイメージや、アルゴン君が部屋の壁に描いた窓の外に広がる何も無い曠野のイメージなどが重なってくるのに対し、「内なるフロンティア」には、これから開拓されて豊かな実りをもたらす無意識の領野——例えばシュルレアリストたちにとっての夢や自動書記などの連想が生じ、より前向きな、新しい創作に向かっていくイメージに変わっている感じがするのだ。もちろん異なる文化圏に移された言葉が同じニュアンスを持つはずもなく、逆にそこからクリエイティブな読み替えの可能性が生じてくるとも言えるだろう。

そのような用語の問題について言えば、カリチマンは日本のローカルな用語に訳注をつけるような学術的だが

読みにくい方法ではなく、できるだけ英語圏の読者に読みやすく理解しやすい翻訳を心がけているようだ。例えば「二、三百円」はそのまま「two or three hundred yen」(p.31)と訳され二、三ドルとはされていないが、「羊頭狗肉」は「crying wine and selling vinegar」(p.34)、「犬猿の仲」は「like cats and dogs」(p.35)、「やくざ映画」は「gangster films in Japan」(p.98)、「ポンチ絵」は「cartoon」(p.107)、「盗人にも三分の理」は「if we give the devil his due」(p.141)と訳されている。最後の部分は、後述するAndrew Horvatが「According to a Japanese proverb, even a thief can lay claim to three-tenths of the truth.」と直訳したところだ。このように、必ずしも日本固有のレトリックにはこだわらず、意味するところを英語の文脈に置き替えているのがカリチマンの翻訳の特徴だと言えよう。しかし安部の文章においてこのような決まり文句が使われるのはごくわずかであり、基本的には原文に忠実で正確な翻訳になっている。ただし、訳注や多少の用語説明が必要だったのでは、と思われる部分がないわけではない。伊藤整の「芸」を「art」、「逃亡奴隷」を「escaped slave」(共にp.20)、「松川事件」を「Matsukawa Incident」(p.31)、「説教強盗のセリフ」を「the preaching remarks a burglar makes to his victim」(p.37)、「九州男児」を「the sons of Kyushu」、「大和民族」を「Yamato people」(共にp.97)と訳すだけでは、欧米の一般読者には理解しにくいだろう。もちろんこんな注文をつけたくるのは、こうした些細な点を除いては、これが見事に読みやすく、専門外の読者の関心をも惹きつけるような訳文になっているからに他ならない。

読みやすさの点で、特に感心したのは最初の「詩と詩人（意識と無意識）」の翻訳である。1944年、まだ20歳の大学生の時に書かれ、生前未発表だったこのエッセイは、全集第一巻に初めて収録されたが、ハイデガーやリルケの用語をちりばめた生硬な文章で、読みやすさからはほど遠いものだった。カリチマンは安部の原点を示すものとして敢えてこのエッセイを選び、意識をしたというのではなく、あくまでも正確に現代英語に訳すことによって、別の文章と見まがうほどにリーダブルなものに仕上げてみせた。その原文と訳文を対比してみると、例えば以下のようなものである。

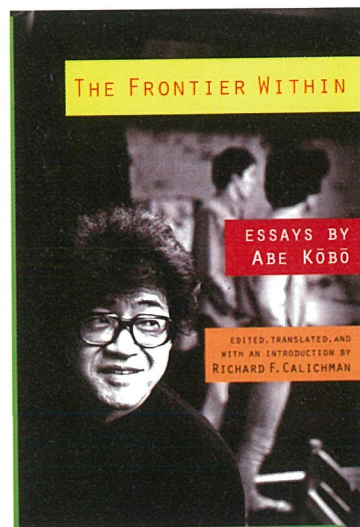
かく見る時、此の自己承認こそ正に夜の自己開示性・内在性・有性格性であって、其処には真の体験的把握がある以上、循環交互作用による否定は適用され得ないのである。かくて夜の体験者たる自己が存在論的優位に置かれている事は明かになった。夜の具体的体験が問い掛ける者を最高の地位に迄引上げるのだ。とは言え吾等は未だ如何なる結論をも得て居ない。唯だ態度を明かにしたばかりなのだ。此の態度を飽く迄も持しつ、吾等は更に夜を、人間の在り方を見つめよう。(全集第一巻、p.112)

Seen in this way, self-recognition is precisely the night's self-disclosure, immanence, and inner character. Because there is here true apprehension as based on experience, any negation through cyclical interaction is inapplicable. Thus it becomes clear that the self that experiences the night is ontologically privileged. The concrete experience of the night raises the questioner to the highest level. Nevertheless, we have not yet arrived at any conclusion but merely explained the notion of attitude. Keeping this notion in mind, let us now turn to the question of the night and man's being. (p. 11)

原文の読みにくさは日本における哲学翻訳語の問題でもあり、ハイデガーの「In-der-Welt-Sein」＝

「世界—内—存在」をはじめとする日常語から遠い漢語訳の専門用語と、「being-in-the-world」といった英訳の用語とでは、そもそもの語感が相当に異なる。さらに後年の安部とは異なり、文語的な言い回しも多用される原文を、カリチマンは現代化してみせた。1942年の『近代の超克』を現代英語に蘇らせた経験のある訳者ならではの仕事と言えよう。

本書の目次は、この最初期のエッセイの後が10年後の「文学における理論と実践」(1954年)となり、以下、「猛獣の心に計算器の手を——文学とは何か」(1955年)、「アメリカ発見」(1957年)、「映像は言語の壁を破壊するか」(1960年)、「現代における教育の可能性——人間存在の本質にふれて」(1965年)、「隣人を超えるもの」(1966年)、「ミリタリィ・ルック」(1968年)、「異端のパスポート」(同年)、「内なる辺境」(同年)、「続・内なる辺境」(1969年)となっている。ここに「ヘビについて」や「砂漠の思想」、あるいは「死に急ぐ鯨たち」といった有名エッセイが入っていないと指摘することはたやすいが、カリチマンの関心がそのような網羅的な紹介にないことは明らかである。この編集は、1968年に発表され、1971年刊行の評論集『内なる辺境』に収録された三編を核とし、そこに至る前史となる評論・エッセイ、それに1965年と1969年の講演記録をも加えたものと見るべきであろう。なぜこれらが中心となるかについては、序文を読むと了解される(以下の訳語と引用は鳥羽編『安部公房 メディアの越境者』森話社、2013年所収のカリチマン自身の日本語訳による)。



国民国家に抵抗する力としての田舎 (countryside) を『砂の女』に見出し、社会におけるマイノリティの問題を『他人の顔』に見出すカリチマンは、そうした安部の社会的な発想が、小説よりも評論に明確に現れていることを指摘する。そしてナチスの軍服と米軍の作業服を比較する「ミリタリィ・ルック」に表れた、ファシスト的な要素をすべての近代的権力に内在するものとする安部の思想を紹介するのだ。さらに彼は「内なる辺境」に書かれた安部のアメリカ批判に触れつつ、はるかに暴力的なナチスドイツよりも、「自らの国家暴力を隠す能力を持っているアメリカのほうが意味でより陰湿」であり、暴力の二重化になっているとする。安部はマイノリティを「贖物」として排斥し、忠誠心を強制する国家の装置を問題にしているというのだ。その支配構造への抵抗の可能性を、カリチマンはほとんど注目されたことのない安部の講演「続・内なる辺境」の中の「逃げ出しっ放し (sustained flight)」という概念に見出す。ユダヤ人やジプシー、脱走兵、流浪者といった人々への注目から使われるこの用語が「プロセス」として語られていることにカリチマンは注目を促し、不安と恐怖を普及させて「住み着く」ことを促す国家の誘惑への抵抗の示唆をそこに読み込んでいるのである。

こうした観点で捉えた場合の安部の可能性の中心はまさに評論集『内なる辺境』にあるし、そのアメリカ批判を翻訳してアメリカに持ち込むことには、現在の政治・文化の状況の中でこそ大きな意味があるだろう。世界中に翻訳されている小説とは異なり、安部の評論・エッセイはほとんど翻訳されていないのだが、数少ない例外の一つは、1975年、ベトナム戦争終結の年に発表された Abe Kobo, trans. by Andrew Horvat, *The Frontier Within*, *Japan Quarterly*, 22-2, pp.135-142, 22-3, pp.255-265 であった。それから40年近く経った現在も、理論的言説よりも文学的言説が優先され、「近代的西洋」が〈陰画〉としての「前近代的東洋」を作り出すような枠組みを強化するとカリチマンが規定する翻訳の政治学は継続中である。ポストコロニアルの思想によるこうした枠組みの見直しも、保守的な文学界・学会の主流と、経済的な利益を考えた場合の出版側の要請の前では無力であるようにも思える。しかしベトナム戦争当時と同じようなとまでは言えなくても、新たな段階のナショナリズムや国家による暴力の露呈と、

それに対抗する社会運動とは緊迫度を増している。日本国内に目を転じてみても、アメリカ化に限りなく近い「国際化」のスローガンと表裏一体の形で進行する近隣諸国への排外主義的な言説の横行は目を覆うばかりである。

そうした状況下で、ここに集められた評論・講演・エッセイを、特にカリチマンによって現代化された英語によって通読することは、アメリカにおいても日本においてもアクチュアルな体験となるだろう。彼が序文の中でドゥルーズ＝ガタリ『アンチ・オイディプス』の英訳に寄せられた、フランス原著にはないミシェル・フーコーの序文を引用していることは注目に値する。翻訳をし、序文を書くことは、新しい解釈となるだけでなく、原著にはないものを加えていく創造的なプロセスなのだ。だからとりわけわれわれ日本の読者にとって、カリチマンが安部の「辺境」を *Frontier* や *countryside* という訳語の文脈に置き直し、一度は忘れられた思想を現代に蘇らせてくれたことは重要である。本書は、安部公房という作家の可能性のみならず、「逃げ出しっ放し」の思想の強度とアクチュアリティをも世に問う、2013年の新著なのだ。

The Frontier Within: Essays by Abe Kōbō

Abe Kōbō; Edited, translated, and with an introduction by Richard F. Calichman.

Columbia University Press

June, 2013, Cloth, 224 pages, ISBN: 978-0-231-16386-6
e-book, ISBN:978-0-231-53509-0